毎日にちょっとの余裕がほしい

丹澤基予子（山梨県・中学校教員）

これまでの私の教員生活を振り返ると、学習指導要領が変わるということを経験するたびに、今度はどんな内容が増えるんだろうと、ある種ちょっとした不安を感じながら対応してきたことを思い出します。

私たち教員は、1年間で子どもたちが学習すべき内容がこれだ、と言われたら、それを確実に教えたいと考えます。時数はこれが標準ですと出されれば、それを下回ってはいけないと思って一生懸命になってしまいます。

中学校に入学すると勉強が不安とか、テストが気になるとか、宿題が終わらないとか、学習に対する不安で欠席する子どもが増えていきます。私たちもそういった不安を抱えた子どもたちや保護者には、あまり気にしすぎずに…というように声掛けもするんですけれども、ほとんどの子が高校に進学する今の状況では、成績を気にしないでいいよというわけにはいきませんし、私たち教員もテストや評価のことを意識してしまいます。

学校は勉強だけではないと私自身も強く思っていますが、いつの頃からか学校生活に余裕がなくなってしまって、私たちも、子どもたちも多忙を感じるような状況です。昔は放課後にクラスの子たちと話しをしたり、クラスレクをする時間を取ったりもできました。子どもたちが少しリラックスした状況で仲間と過ごしたりできる時間を持てて、学習が苦手な子にも放課後対応するようなことができていて、そういう、リラックスした時間の会話の中で、悩みを聞けたり、クラスの状況をつかんだりしていたと思います。

今はデジタル化がすすんで、様々なことが別の場所にいてもできるようになってきました。学校にいなくても学習できることは良いことだと思っています。だからこそ、わざわざ学校に来る意味というか、私たちが集団生活で一緒にできる楽しさですとか、集団のなかでの自分の存在意義を確かめられるというような、学校に来る意味をもう1回考えたいと思います。学校での毎日にちょっと余裕のある時間が持てれば、苦手なことを復習する時間が持てたり、クラスのことや仲間のことを考えたりする時間が、私たちにも子どもたちにも持てるのではないかと考えています。

「先生と話せた」ことの満足感を

郷司和秀（三重県・小学校教員）

私が今一番現場で課題と感じていることは、不登校児童生徒が年々増加しているということです。地域差もあると思いますが、私のいる市でも増えています。不登校の原因というのは、学習の不振であったり、友達関係の悪化であったり、家庭環境であったりと一概には言えません。ですが、子どもたちが学校生活に疲弊してしまっていることは一つ挙げられると思います。

これを解決の方向に持っていくには、私は教員1人あたりの授業数、いわゆる持ち時間数を減らすことだと考えています。これは教員が楽をしたいわけではなく、持ち時間を減らすと子どもたちと話をする時間が今よりも確保できるからです。

子どもたちは先生と話をしたがっています。勉強のこと、友達のこと、放課後の習い事のこと、家庭のできごとまで、朝登校してきてから帰りまで、どの学年を担当していてもずっと誰かしらが話しにきます。子どもたちは「先生と話せた」ことで、結構満足して帰っていくものです。

子どもが先生やクラスに満足すると、保護者も満足します。そうすると子どもたちは翌日も元気に登校してきますし、保護者も満足されますから、いわゆる保護者対応も減ります。

教員にとっても、なにより子どもたちにとってカリキュラムがオーバーロードの状態になっていることは事実で、全体の時数を減らすことも、それに合わせて内容を減らしていくことも必要です。それプラス、教員の数を増やすなどして、授業の持ち時間数を減らし、時間的余裕を作り出すことが課題解決への一助になると思っています。

ここ何年かで、個別最適な学び、誰一人取り残さない教育、等がさかんに言われていますが、現状では難しいです。「誰一人取り残さない教育」と言いま